

Title	言語文化学 Vol.7 編集後記
Author(s)	ヨコタ村上, 孝之
Citation	大阪大学言語文化学. 7 p.251-p.251
Issue Date	1998-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78084
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

編集後記

会員の一人から次のような批判を聞いた。「言語文化学」なるものは方法としても理念としても存在していない。現在なされている「言語文化学」的研究とは、単に言語文化部という部局にたまたま席を同じくしている、言語学者と文学（文化）研究者による、旧来の方法に依拠した研究の寄せ集めに過ぎない、と。この厳しい批判はある程度まで正鵠を射ていると思われる。同時に編集委員としては次のように回答したい。まず、近來の系譜学的な文化研究の中では、方法が学制を形成するのではなく、大学における学問の制度化が逆に方法を析出させてきたのだということが歴史的に跡づけられつつある。制度が先行し、「中身」である方法が後追いしているという状況は自然なのである。次に、方法の確立とは、実はその硬化を意味しているということも頭に留めておく必要がある。「言語文化学」的研究とはこのようなものではないという規範の完成は、たとえば「女らしさ」に関する言説と同じように抑圧的なのだ。本号に収められた諸論文は、全体として、先の批判者の言う通り、ホジホジなのかも知れない。だが、そのことは、真理は複数であるという、近年の認識と平行しているのかも知れない。（ヨコタ村上）

1998年3月

編集委員会

編集委員

ヨコタ村上孝之（委員長）、

ディボフスキー・アレクサンドル（委員長代理：9月まで）、

ヨコタムラカミ・ジェリー、細谷行輝、井元秀剛、小門典夫、五十嵐徳子、

上村和美、大谷 朗、中村 洋、松井理直、永野晶子、安永昌史、横田睦子、

横山 香、宮崎衣澄